健康な笑顔がつどういきいき吹田

Kenkó Suita

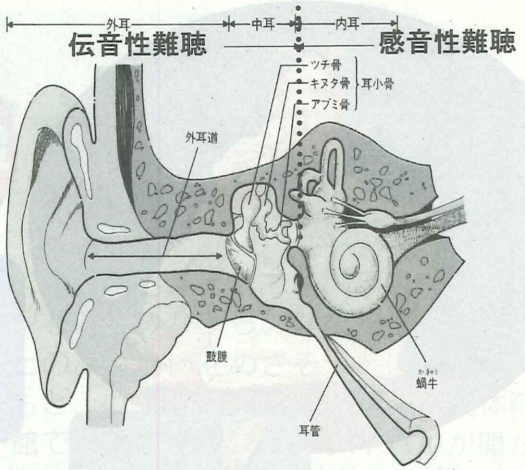
老人性難聴

吹田市医師会　津田守
（津田耳鼻咽喉科クリニック）

人間には五感があるということはご存知だと思います。五感とは、視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚をいいます。五感は生命には直結しませんが、人間の日常生活には必要不可欠なものです。この中で聴覚に障害が起こると言葉の聞き取りや発声に問題が起こりコミュニケーション障害を生じ、社会からの孤立や引きこもり、うつをまねきかねません。

さて老人性難聴のお話をする前にまず耳の構造と聞こえの仕組みについて簡単に説明したいと思います。耳は、外耳・中耳・内耳・と大きく3つの部分に分かれます。外耳は、耳介、外耳道、中耳は鼓膜、耳小骨からなり音の振動を内耳に伝える機能があります（伝音系）。内耳では蝸牛というところで音の振動を電気信号に変え聴神経をへて大脳で音を認知する仕組みになっています（感音系）。この長い径路のどこが障害を受けても難聴が起こりますが、外耳・中耳までの障害でおこる難聴を伝音性難聴、内耳から大脳までの障害でおこる難聴を感音性難聴といいます（図参照）。伝音性難聴は手術を含めたいろいろな治療でなおる可能性が高く補聴器もきわめて有効です。それに対して感音性難聴は一部の疾患（突発性難聴など）を除いて回復が非常に困難で補聴器の適合も難しいケースも多々あります。

老人性難聴は感音性難聴の代表例のひとつです。人間は加齢とともに高音部から徐々に聴力が低下していきますが、内耳だけではなく大脳などの中枢障害を伴うため聞こえが悪くなるだけではなく言葉の聞き取りが悪くなるのが特徴です。残念ながら現在の医療ではこの老人性難聴を治すことが出来ません。そこで難聴をカバーするために補聴器が必要になるのです。補聴器はつけても雑音が大きくあまり聞こえが良くならない、使い方が煩雑、年寄りくさい、高価などの理由で普及が妨げられているようです。この問題を少しでも解決するためには自分に合った補聴器を作ることがもっとも重要になります。そこで自分に合った補聴器を作るにはいったいどうすればよいのでしょうか。まず耳鼻咽喉科専門医で難聴の原因と程度を調べてもらいます。中には治療により難聴が改善する病気が見つかることもあります。ここで補聴器が必要と診断されたら現在の耳の状態、聴力図などの情報を付けて信頼の出来る補聴器専門店を紹介してもらうのが良いと思います。実際に補聴器をつけて試聴と音質や出力の調整を行います。日常生活の様々な場面で使い調整と試聴をくりかえし自分にあった補聴器を作っていくのです。



補聴器の種類は形から箱型、耳かけ型、耳穴型に分けられ、調整法からアナログ式、デジタル式に分けられます。それぞれ一長一短があり高価なほど良いというわけでもなく自分の用途に合わせて選ぶことが重要です。

最後に私のおすすめする補聴器の上手な選び方・使い方5か条を書いてみますので参考にしてください。

1. 聞こえにくいと思ったら早めに試す
2. 慎重な機種の選択。専門医や補聴器販売店の技術者とよく相談して自分に合ったものを
3. 両耳につけることも考えてみる
4. リハビリが大事。根気よく使って常に音刺激を加えて大脳に活性を
5. 補聴器の限界も理解して。以前のよく聞こえていた時とまったく同じようにはいきません